

「こんな」 しています。

わだいの「びん」

— 114 —

ペットボトル

500^{ミリ}のペットボトル5本からワイシャツ一枚が作られるそうです。意外な組み合わせですが、ペットボトルの再生技術はどんどん進歩しています。

ペットボトルが日本に登場したのは今から40年前、おしよゆの容器でした。その後1^{リットル}以上の飲料用にも使用され、1996年にはそれまで自主規制されていた500^{ミリ}の小型飲料ボトルの生産が解禁。そつなると気楽にどこでも飲料を飲むようになり消費も、こ

みも増える、ペットボトルの原料は石油など地下資源のため、ごみ問題、環境問題にとって取り返しつかないことになり、と世論をにぎわせたものです。分別回収や再生を促進するリサイクル法が施行されるのは翌年の1997年でした。解禁とともに「水を買って飲む」行為も出てきました。健康的でナチュラルなイメージで、ミネラルウォーターのボトルを持ち歩く女性の姿が新しくおしゃれでした。

この20年間、ペットボトル飲料は増殖し続け、とうとう急須に替わって

かっこいい「水」

食卓の上にも当たり前に置かれるようになり、水道水を生でごくごく飲む姿はほとんど見掛けなくなりました。

かっこいい環境問題

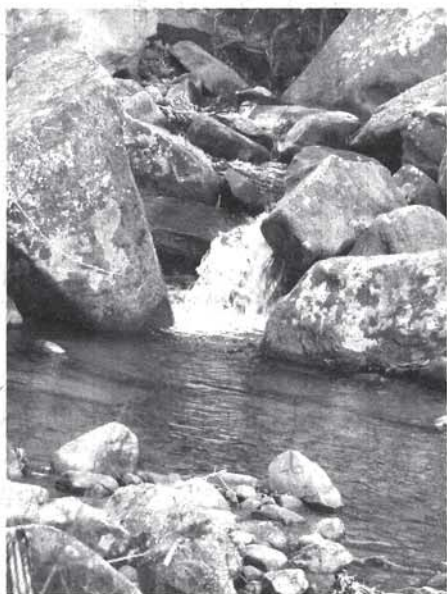
現在、世界で販売されるミネラルウォーターは数千種。日本でも1000種以上が流通しているといわれます。当然そこには激しいマーケティング競争が存在します。

最近のヒット商品といわれるのが力を入れなくてもペットボトルをクチ

ヤクチャと握りつぶすことができるタイプ。従来になかった超軽量ペットボトルを実現した技術力と、環境に優しいイメージが成功要因でした。商品名も自然志向の生活で

あるロハスをイメージさせるものになっていきます。クチャクチャという小気味よい音と感触がかつこよく、健康や環境問題に参加している気分させたともいえます。

紀ノ川農協は安心安全の農産物の産直を行う販売農協ですが、最近の課



今も地区の飲み水となっている山の天然水(古座川町)

問題は食の安全安心を「直球で」訴えるだけでは、若い層にはなかなか広まらない、食や環境への理解が当たり前に浸透するには限界を感じているとこのことでした。

食や環境問題への危機感が家庭にまで知られるようになったのは70年代後期。その頃に起こった安全な食を求める産直運動は、多分に理念や個人のこだわりで広まりました。

化学肥料や農薬を使用しない有機農業の草創期だったため虫食いだらけの野菜や固く酸っぱい果実など、それは思想です。しかし、40年の時を経て、一方ではペットボトルは驚異的に一般に広がり、一方で、農産物直売所の隆盛はあるものの、食や環境への認識は、いまだに「特殊」の壁を超えていないといえるのかもしれない。

天然水の採取実習



ペットボトルと環境や経済問題との収支については、評価も多様でまだ議論が必要ですが、超軽量ペットボトルから環境が意識せず身近になったことは事実です。いや、そんなことよりも、まずは買つのを控えようよ、あるいは産直トマトをトレーなしで買おうよ、そんな行為が当たり前でかつこよくなるにはどうしたらよいのでしょうか。「かっこいい」の解析は面白いテーマになるはず。若い世代のアイデアで突破できないものでしょうか。

プロフィール



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。